

佳作

手紙

宮城県仙台市立仙台青陵中等教育学校

2年 堀内 津麦

心が疲れてしまうことがある。理由は分からない。けれど、同級生との接し方が分からなくなったのは確かだった。

以前まで、友人関係で悩むことはほとんどなかった。むしろ、友達と話すためだけに学校に行っていたようなものだった。友達と話すのが楽しくて、ケンカをしてもすぐ仲直りすることができた。そんな私が、同級生と話すのがつらいなんて。私は自分にいつも問いかけていた。

「いつも通りに話せばいいじゃない。」

「どうして前と同じように話せないの？」

答えは返ってくるわけなく、そんな自分にいら立ちを感じているのに、涙が頬をつたる。怒っているのか悲しいのか。自分の体が理解できなかった。

ある日、学校から帰ると、郵便受けに手紙が入っていた。花柄の可愛い封筒だった。

「先生からだ！」

私は急いで靴を脱ぎ、はやる気持ちを抑えながら丁寧に封を開けた。

私にはいつも力になってくれる先生がいる。小学生のころ担任だったまほ先生だ。何でも相談できる、大好きな先生。今でも文通でのやり取りが続いている。この時代に文通？ と思われるかもしれないが、既読の確認がないやり取りが私にはあっているように感じるのだ。

先生からの手紙には、最近あった嬉しかったこと、楽しかったこと、悩める私へのアドバイスなどが書かれていた。

「仲が良いふりをするのと、本当の仲良しになるのとではだいぶ違うよね。全員と好み合うわけではないし、全員に自分が合わせるのも疲れちゃうし。でも、性格が合わない人にこそ優しく、親切に、を心がけてみてほしい。」

たった3行。この3行が私の疑問のすべてに答えてくれた。心の中で絡まっていた糸をほどいてくれた。

「こんな大人になりたい。」

いつの間にか、まほ先生は私の目標になっていた。

先生からの手紙が届く前まで、会話がうまくいかないことがあると、合わない決めつけ関わろうとしなかった。しかし、合わないからと関わることを諦めては何も成長しない、そう思い、自分に反省点がなかったか考えてみた。相

づちに悩んでいるときの私の顔は、つまらなそうな顔をしていると思われたのかもしれない。知らないうちに、相手を傷つけるようなことを言っていたのかもしれない。

「学校とは小さな社会。大人になる前の練習場所なのだよ。」

いつか届いたまほ先生からの手紙にはそんなことも書かれていた。今までの反省点を次に生かすこと。きっとそれが、目標に近づくための最初の一步だろう。

最近はラインや電子メールなどの方が、手紙よりも身近に感じるだろう。時間もかからないし、お金もかからない。それでも、私は文通がすきだ。人の思いが文字に現れるから。私は、まほ先生と文通でつながっていて本当に良かったと感じている。

今も、夏休み明けも、その後も、きっとつらいことはたくさんあるだろう。うまくいかないことだってたくさんあるはずだ。つい失敗した時のことを考えてしまうが、まほ先生の魔法の3行がある。いつも応援してくれる家族もいる。遠い場所から支えてくれている人もいる。それを信じて、自分ができる最大限の努力をしていきたい。

夏休み中、私は二つ手紙を書いた。一通は夏休みの思い出をたくさん詰め込んだ、まほ先生への手紙。もう一通は、未来の自分へ。10年後、今の私に向けて手紙を書いてくれることを楽しみに待っている。